

島の暮らし：イザリ漁

奄美大島海を取り囲む海の生物でいっぱいの珊瑚礁は、何世紀も前から島民たちの日々の糧の供給源でした。海岸からリーフの端までの浅い海はイノーと呼ばれ、干潮時には男女がここに集まって様々な魚介類を獲ります。地元の人たちは、一番収穫が見込めるのは、イザリ漁（night harvesting）、特に最も盛んになる冬の夜間、潮位が最も低くなる時であることを知っています。地元の慣習によると、猛禽類の渡り鳥がシベリアからやってくるのが合図となって始まるイザリ漁のベストシーズンは、11月から2月まで続きます。

イザリ漁の道具

標準的な装備は、ウィンドブレーカー、防寒着、強力な懐中電灯、長柄の槍、そして凹凸したサンゴや岩の上を歩くための厚底の長靴です。人々はそれぞれの経験や技術に応じて道具に工夫をこらしていますが、定番は漁獲物を入れてリュックサックのように背負うことができる伝統的な竹のかご（イビラクまたはティル）です。

漁獲物

リーフの岩場や潮溜りは海の恵みが豊富です。サンゴ礁に棲む生き物の多くは彼らにとって運が良いことに夜行性ですが、夜行性でない生物は眠っていて反応が鈍いのでより容易に捕まえることができます。サザエ、ウニ、カニは岩間から剥がして獲ります。海に逃げるできない魚は槍で捕まえます。サトウキビの収穫の合間の気分転換をする農家の人から、冷蔵庫のストックを増やしたり、獲った魚介類を友人や近所の人におすそ分けしたりするつもりの家族づれまで、さまざまな人がこの伝統的な漁法に参加しています。暗闇の海岸に灯が揺れる様子は、思い出に残る奄美大島の風景です。